Guitar dream　NO.32(2012. 1)の紹介　by yakateru

表紙

メイン目次

【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　加藤政幸

ドイツ在住の日本人ギタリストで、2008 年に帰国、その後は日本で活躍ということです。

- ジークフリート・ベーレントの所属するギター・マンドリンオーケストラで弾かせてもらいました。演奏会直前は、普通は指慣らしや爪の手入れをしたりとナーバスになるのでしょうが、ベーレントは、直前までタイプライターで事務作業をやっていて、出番になるとステージにスッと出てパット弾いちゃうそうです。
- ドイツで驚いたのは、演奏会で現代曲が多く演奏されていること。子供のうちから普通に現代曲を聴かせているそうで、小学生の音楽の授業で、ブリテンの「ノクターナル」を聴かせて、感想を尋ねたりアナリーゼをしたりしているそうです。
- ヘルマン・ハウザー・ギター財団の代表を務めています。エクアドルでギター教育をしている方にギターを贈るとか、楽譜やＣＤの出版を行っています。
- コンクールを主催していて、ヒナステラやホセのような難曲を弾く人が、簡単に見えるバッハの小品が演奏できないのを多く見ました。易しい曲なんてないんですね。ブリームも言ってました「みんな、ラグリマは易しいと思っているだろう。でも録音するとなると大変なんだ」と。
- ドメニコーニの「砂山変化」は、私が、日本の民謡に素晴らしい曲が沢山あると紹介して作ってもらいました。彼は、日本のわび・さび、機知を知っている人です。

【（新）話題のアーティスト紹介　橋爪皓佐】

マンドリンで有名な同志社香里中学校に入学してマンドリンクラブでギターを弾いていましたが、本当に面白くなくてすぐにやめたそうで、その後は、独学で作曲を学び、ベルギーに留学したギタリストです。

【クラブ・マリアデュオのインタビュー：中峰秀雄】

日本人にはないダンディズムを持っているギタリストというマリアデュオの評価です。イケメンとはまた違うかっこよさでしょうか。彼も、一時期、新堀合奏団に属していたそうですが合奏が嫌ですぐにやめたそうです。また、強盗に襲われて腕を切られた経験もあるそうで・・・ブラジルに永住権をもらって住んでいたり、・・・

【その他の注目すべき記事】

- 「新マエストロ養成講座：長谷川郁夫」：第 19 回は、ソルのギャロップＯＰ32－6 です。懐かしい！
- 「21 世紀のギター教本＃２：佐藤弘和」：今回は、アポヤンドと消音の解説です。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：今回は、ガシュインの「魅惑のワルツ」です。
- 「ソロギターのためのシンプル・アレンジ講座：竹内永和」：今回は、オン・コードの解説です。和音の載せ方ですが、「ベース音に載せる」「和音の上に載せる（コード・オン・コード）」の二通りがあるそうです。サンプル曲として、映画音楽で有名な「80 日間世界一周」が掲載されています。

今回は、「イュラン・セルシェル来日特別インタビュー」もあります。『「遅く弾くこと」が重要だと感じた。バッハの組曲も、真ん中に置かれているゆったりしたサラバンドを中心に、そこにピークを持っていくように取り組んでいる。まるで富士山の描くカーブのように』と語っているのが印象的でした。
また、「天津のクラシックギター事情」では、ほとんどの音楽院にギター科があり、毎日 12 時間のトレーニングを積んでいるそうです！ただ、テクニックの面だけに力を入れているわけでもなさそうです。

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下の楽曲が掲載されている。

ヨハン・シュトラウス（J. K. メルツ編曲）
《アンネン・ポルカ》《ウィーン、わが心》

毎年１月１日に行なわれるウィーン・フィル恒例のニューイヤーコンサートにちなんで、ギターにアレンジされたシュトラウスの曲を２曲。メルツがこの曲を編曲した頃は、シュトラウス親子の曲が大流行しており、家庭音楽の中心がギターからピアノへと変わる時期だったが、まだレコードや放送などがない時代では、このような出版が作品を広めるのに大いに役立った。（玉置義弘）

P. I. チャイコフスキー（壷井一歩・編曲）
トロイカ

チャイコフスキーのピアノ作品集《四季》から、もっとも有名な《トロイカ》をお届けします。原調もE-Durで、非常にギターに合う曲です。
ユニゾンで演奏されるりりしい主題を持つ冒頭部分と、減４度、減３度を含むやわらかな旋律の囚の性格をはっきり変えて演奏するとよいでしょう。囚は、もともとギターのために書かれていたのではないかと思うような伴奏形です。楽器をよく鳴らしてください。
（壷井一歩）

佐藤弘和
エチュード“月蝕”

2011 年 12 月 10 日は好天にも恵まれ、関東などではきれいな月蝕を見ることができました。夜空の星や天体にはやはりロマンを感じずにはいられません。ちょうどこの月蝕と作曲の時期が重なったので、神秘的な月蝕にインスピレーションを受けて曲を作ることにしました。エチュード“月光”ならぬ“月蝕”…。
でも、途中ではやはりソル《月光》の和声を借用してしまいました。曲は即興的な前奏から始まり、アルペジオの主部へと導かれます。最後にはまたゆっくりとして終わるなど、曲らしい構成を持っていますが、全体的にはこのアルペジオのエチュードと考えてさしつかえありません。最初はゆっくり丁寧に私を弾えるように練習し、最終的には曲想にそった表現ができるように、抑揚をつけて演奏してください。
（佐藤弘和）

スコット・ジョプリン（角圭司・編曲）
ジ・エンターテイナー

映画「スティング」のテーマ曲に使われた、とても有名な曲です。スウィング感が出るように演奏しましょう。テンポは、比較的自由な設定でかまわないと思いますが、シンコペーションが大事ですので、崩れない程度に。低音は比較的大きめに出してよいと思います。
（角圭司）

グレン・ミラー（平倉信行・編曲）
ムーンライト・セレナーデ

前号と同様に往年のスタンダードジャズです。ゆったりと雰囲気を持って演奏しましょう。シャッフルのリズムのノリを全員が合わせることが第一です。4th は、４分音符のピチカートを正確に、しかもノリを出すという重要な役目があります。また、メロディー以上に印象的なオブリガートは軽く全体の雰囲気を作っていくようなつもりで弾いてください。ノリを出すために走らない、正確さを求めるあまりリズムがモッタリしない、ということが要です。（平倉信行）

イギリス民謡（壷井一歩・編曲）
スカボロー・フェア

ホマドリームの前社長、菅原潤さんのアイディアで書き始めた編曲集《新 12 の歌》は２年前に完成し、その後すぐに宮下祥子さんが素晴らしい演奏で CD に収めてくれました。2011 年 10 月には楽譜も発売になりましたが、実はこれにはもう１曲あったのです。12 曲の最後の１曲を何にしようか迷っていた時、菅原さんはこの《スカボロー・フェア》を提案し、ほぼ同時に宮下さんが山田耕筰《この道》をリクエストしました。宮下さんの CD に収録されることが決まっていた《新 12 の歌》のラストは《この道》。《スカボロー・フェア》はひとまず、菅原さんへの個人的な贈り物になりました。
でも、この《スカボロー・フェア》は、武満徹氏へのお礼状でもあります。氏の偉大な編曲集《12 の歌》とは異なった領域を切り開きたいと願いつつも、当然その強烈な影響なしに《新 12 の歌》は書けませんでした。敬愛する氏の作品の中でもっとも好きな、《すべては薄明の中で》の第４曲が引用されています。（壷井一歩）